



上／鈴木牧場は500㌔の広さがあり、肥育牛360頭、放牧の繁殖牛400頭を飼育している。頭数を増やすと品質が落ちる恐れがあるため、現在の頭数が最適だと話している。下／鈴木牧場の肥育場内。出荷には約30カ月かかる。空気の滞留による感染症のリスクを軽減するため、場内では空調をかけて飼育されている。

ースト市が重要施策として取り組んでいる観光施策について説明を受けました。

バサースト市には年間10万人を超える観光客が訪れます。観光客は退職者やファミリー層が多く、それらの観光客はゴールドラッシュで賑わった当時の歴史探訪やモータースポーツ観戦を目的に訪れているそうです。

バサースト市の観光施策は、始めからうまくいったわけではなかったと言います。いかに観光

地として魅力的な地域にするかを目的に市場調査などを行い、その結果を踏まえて観光施策の計画を策定し、地元の業者やコミュニティを巻き込んで、ブランディングに取り組みました。具体的には、歴史探訪のための遺産の掘り起こしや、ウインターフェスティバルといった新しいイベントの創出、スポーツ施設の整備などです。また、こうした観光施策が効率的に届くよう、ウェブサイトや雑誌などの媒体を活用し、情報発信に努

めていました。これらの取り組みが一定の成果をあげ、2015年に90万人弱だった観光客が現在では約124万人にまで増えていきます。2023年にバサースト市は、国内でも数少ない人口増の自治体となったそうです。

観光資源の掘り起こしが市民や移住者の生活を豊かにしている良い事例でした。

最後に訪れたのは鈴木牧場です。鈴木牧場は和牛の繁殖・肥育を一貫して行っている牧場で、経営者の鈴木氏は日本で酪農経験を積み、オーストラリアへ渡って2020年から牧場を始めました。牧場は500㌔という広さで、牛舎は3棟のみ。それ以外はすべて放牧で飼育していました。牧草の栽培、牛の飼育、堆肥の均衡・循環を実現することで、できる限りオーガニックにやっていきたいという鈴木氏の考えをお聞きました。牛肉は日本にも出荷するの話を聞いたところ「その考えは全くありません」とのことでした。鈴木牧場で取り扱っている牛肉はオーストラリア国内でも高い評価を得ていることから出荷先は国内、また中東とのことでした。これからのマ

将来を見据えたまちづくりを考えたとき、やはり大切なのは視野を広げることです。世の中の動向にもしっかりと注視していかなければならないと改めて強く思ったところです。

このたびの視察では、初めて体験することも多く、貴重な経験をさせていただきました。なるべく早いうちから異文化に触れ、いろいろなことを感じ、考えることが大切です。町の将来を担う中高生を対象とした「青少年海外研修事業」や、異業種の若者たちによる「青年就業者海外等研修事業」といった海外の文化や歴史を肌で感じることができ的事业は、これからも継続していきたいと考えています。

異文化に触れ視野を広げる

ーケットは中東だということです。将来を見据えると、やはり生産場所、生産するもの、さらにマーケット先、これらを考えることが非常に重要になってくると思います。

地域資源を生かし まちを発展させていく

――調査団は22日にケアンズからシドニーへ移動。翌23日にオーストラリア北東部に位置するニューサウスウェールズ州を訪れました。

次は漁業についてです。水産資源を守るため獲ることが出来る魚介類の大きさや量、季節による漁場のローテーションなどの規制が法律によって定められていました。また、カキやエビなどの養殖も行われていました。将来を考え、水産資源を確保していくことが重要であるという認識は、我が町と同じです。

他にはマツの木も植林されています。植林地も広大な面積があることから山火事があった場合、どのようにして林地を回復するのか尋ねたところ「何もしないで、自然に回復するのを待つ」ということでした。やはり日本とは規模が違うのです。私は「何もしない」ということに驚きはしたものの、広大な土地を目の当たりにすると、この答えには「なるほど」と思われました。

この日は始めにシーニック・ワールド社を訪問しました。シーニック・ワールド社は世界遺産ブルーマウンテンズにあるカトゥーンパに位置する観光事業者です。同社の設立は1945年。かつて炭鉱だった場所を観光名所として刷新したことに始まり、ブルーマウンテンズの自然を持続可能なかたちで活用しながらカトゥーンパの発展を目指した事業を展開していました。

シーニック・ワールド社は、ブルーマウンテンズの自然を楽しむことができるさまざまな機会を提供しており、毎年100万人を超える観光客（うち約10万人は日本人）が訪れているとのことでした。地域資源を生かした観光業には学ばべきところがあります。

次に訪問したのは、同州の自治体「オベロン」です。ここは、人口4000人の小さな町で、約5万㌔にもおよぶ針葉樹植林地が広がっています。オベロンの原生林は広葉樹ばかりであったため、1929年から州政府の主導により針葉樹の植林を行い、以来毎年植林が行われています。植林されているのはマツの木で、そのマツを

利用して現在は町内にある工場で木質ボードが生産されています。オベロンで伐採された木材はすべてオベロンの木材加工場に集約され、工場で加工されている針葉樹は年間約100㌔。工場はコンピュータでオートメーション化されており、その電力は2700枚のソーラーパネルで賄われています。林業によってオベロンの経済は大きく発展していました。

たくさん生えているユーカリの利活用について尋ねたところ、ユーカリは硬くて加工が難しいことから、その用途は特殊であるとのこと。バイオマスエネルギーの原料としてもほとんど使われていないということでした。これらの話を聞いて、やはり地域の気候風土や実情に合わせたものをそこで作り育て、利活用していくことが大事なのだと改めて思ったところです。

――24日の最終日、訪問団はバサースト市役所を訪れました。

ニューサウスウェールズ州の内陸部の都市、バサースト市の市役所を訪れました。ここでは、バサ



右／ブルーマウンテンズの景色をさまざまな角度から楽しめるよう、スカイウェイ、ケーブルウェイ、レールウェイの3種の乗り物のほか、高架木道や遊歩道が整備されている。中央／手に持っているのはユーカリの枝。ユーカリの葉から採れる油には殺菌作用があり、清掃に利用される。左／オベロンでの伐採。なだらかで広大な土地で行われている。